

ソーイングで心を紡ぐ

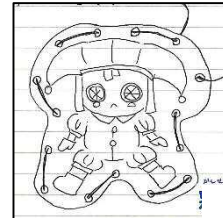


3学期がスタートした初日。始業式が終わった後、ある1年児童が校長室の扉をノックして入ってきました。見ると、体の半分ほどもある人形を抱えています。「そのお人形さんはどうしたの?」と尋ねると「手作りしたの。」と満面の笑みを浮かべながら答えてくれました。人形と一緒に持っていたファイルを見ると、人形が作られた経緯が、自由研究としてまとめられていました。

- ①冬休みのある日、大好きなアニメのキャラクターを作ろうと思いつく。
- ②紙と紙を合わせ、穴あけパンチで開けた穴に紐を通し、綿の代わりにその中にティッシュペーパーを詰め込む。
- ③一緒に寝たら、ぐちゃぐちゃになり、朝から大泣き!



- ④フェルトを使って、ぬいぐるみを手縫いで作ろう!
 - ・縫い物は練習済み(全部手縫い)
 - ・デザイン画でイメージを表出
 - ・材料集めと縫製は親子で(大きなパーツを児童が担当・母親は補強)



紙を使うことで見つかった課題を解決するために、布を縫い合わせて解決しようとしたこと、のりやボンドではなく、針と糸を使って縫うことで丈夫なものを完成させようとしたこと

これこそが、家庭科の目標にもある「生活をよりよくしようと工夫する資質・能力」であり、育成を目指している「思考力・判断力・表現力等」の礎であると感じました。

作られた物というのは、その背景に必ず生産者がいて、たくさんの行程を経て今ここにその物が存在する。作る側、使う側、両者の気持ちを理解することで、世の中にはこうして大変な思いで作る人がいることを知り、大切に使うことを学ぶことができるのではないかと感じています。(1年児童の母親の言葉より)

子供の思いや願いに深く寄り添うことができる素晴らしい保護者の方に巡り合うことができ、改めて、子供たちのウェルビーイングの実現のために頑張りたいという思いを新たにした3学期の初日の出来事でした。

校長室には、毎日いろいろな子が訪れます。教室に入れないう子、自分の感情のコントロールができずに苦しんでいる子、友達や家庭の悩みを抱えている子等、様々です。そんな子たちと一緒に小物づくりをしていると、言葉を交わさずともいつの間にか、感情のコントロールができるようになったり、悩みを打ち明けることで明るい表情を取り戻したりと変化が見られます。まるで、一針一針縫い進めるごとに、心を紡いでいくような感覚です。

今年の箱根駅伝で優勝した青山学院大学で、直前に足を負傷した選手が出場選手全員に手作りのお守りをプレゼントしたエピソードが紹介されていました。ソーイングには心を紡ぎ、繋いでいく力があると信じています。

令和5年度も残りわずかになりました。家庭科の学習が、小学校家庭科部のテーマ「よりよい生活を自ら創り出す子供の育成」につながるよう、よろしくお願いいたします。

浜松市立追分小学校長 坪井百合子

神久呂小 6年「できることを増やしてクッキング」

短時間で簡単に調理できる「いためる」ことを学習することで、食に対する関心を深め、自分でもできることを増やすことを目的として本単元を設定した。

【実践内容】

- (1)「ゆでる」と「いためる」の違いを学習した後、まず、スクランブルエッグの調理実習を行った。学校では、調味料を用意した。児童には、卵を用意させたが、中には家庭でアドバイスをもらい、バターや牛乳を持って来た児童もいた。
- (2)「いためる」に適した野菜や切り方を学習した後に「三色野菜いため」の調理実習を行った。調理計画を立てる際には、調理に適した分量に小分けした野菜（12種類2セット）を用意し、1人分の目安を確認できるようにした。また、計画を立てる授業を参観会の時間に実施することで、野菜の組み合わせについてアドバイスをもらうことができた。
- (3)朝食の大切さや朝食づくりで大切なポイントについて学習し、実習したことが家庭での実践につながるよう指導した。



【成果】

- ・「スクランブルエッグ」の実習では、卵は、短時間で調理できることや火加減、混ぜ方によって仕上がりに違いがあることに気付くことができた。
- ・調理計画の時、実物の野菜を用意することで、野菜のかさや硬さなどを実感することができ、いためる順番や使う野菜の組み合わせを考えながら計画を立てることができた。
- ・選んだ野菜や選んだ理由をオクリンクに投稿させ、友達との交流に活用することで、調理の目的や野菜の選び方についての考えを広げることができた。
- ・実習前に家庭で練習をしたり、実習後に多くの児童が家族のために調理したりする様子が見られた。

(文責：早瀬富美子)

気賀小 6年「生活を豊かにソーイング」

【実践内容】

本校の6年生は、家庭科に対し、意欲的な児童は多い。しかし、手縫いやミシン縫いの技能が身に付いていない児童もいる。本学習では、「トートバッグ」を製作した。その中で児童が進んで取り組めるよう以下の2点に取り組んだ。

(1) 気賀っ子応援団の協力

本校では、CSと連携をとり、「気賀っ子応援団」としてボランティアを募集している。授業に入っただき、児童へ糸のかけ方や縫い方等のアドバイスをしていただいた。

(2) 視覚的な工夫

トートバッグの作り方を拡大印刷し、黒板に提示した。製作のポイントを記すことで、何をすればよいか分からなくなってしまった児童が確認できるようにした。



【成果】

気賀っ子応援団に協力していただいたことで、児童が分からないことをすぐに伺うことができ、作業が効率的に進んだ。また、教員一人では、目が行き届かないところも、多くの目があることで安全性も高めることができた。一方で、作り方を掲示しているにも関わらず、すぐに伺うことのできる環境が、児童の思考を停めてしまっている場合も見られ、今後の課題につながった。

(文責 土射津佐紀)

第60回 全国小学校家庭科教育研究会 全国大会 神奈川大会 報告

令和5年10月27日 神奈川県横浜市立東小学校、テンネー記念ホール

大会主題

豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育

研究主題

自らの生活を豊かに創造する子どもの育成

公開授業参観・研究協議より

★公開授業参観

5年 「食べて元気に ご飯とみそ汁」

6年 「家族のためにつくろう 1食分のこんだて」

横浜市立東小学校では、「人権教育や多文化共生の観点から、誰もが安心して学ぶための家庭科の授業づくり」を研究の柱として授業を行っていました。

東小学校は、全児童数の3分の1が外国につながりをもっており、生活文化が多様であるという実態から、個性を尊重した関わり合いを大切に、家庭での実践へとつなげていくような工夫をしていました。

5年の授業実践では、オリジナルみそ汁（家族が食べて元気でおいしい）について考える授業でした。ワークシートに継続して記録していくことや、栄養教諭からのアドバイスなどを生かし、調理実習を計画・実行します。それで終わらず、実習の振り返りをもとに家庭実践の計画を見直し、ペアの児童に変更点を説明したり、質問をし合ったりすることで、よりよい家庭実践への意欲を高めていました。

6年の授業実践では、題材を「給食コンテスト編」と「家庭実践編」の2つに分けた題材構成でした。まず、「給食コンテスト編」では、多様な文化をもつ児童の誰もが安心して学ぶために、学校給食を共通教材として、栄養教諭の助言を受けながら献立作成の基礎を学んでいました。次に、「家庭実践編」では、2年間の食題材の総括として、各家庭の実態にあった献立作成と家庭での実践を行います。基礎を学び、実践に生かすといった学習の流れが、子供たちの意欲を自然と引き出していました。多様な食文化をもつ子供たちが、互いに尊重し合いながら話し合う姿が印象的でした。

★研究協議

・限られた時数でよりよい実践を行うために、4月のカリキュラム・マネジメントが大切になる。また、実態に合わせて修正を加えていくことも必要。

・栄養教諭との連携が大切。自校に不在であっても、動画やオンラインを活用することができた。

・献立作りの学習では、組み合わせを考えさせたいので、副菜は選べるようにした。

・子供の発表に教師が「問い掛ける」ことは、思考を深めるためにも有効。

・1つの題材を2つに分けることで、知識を生かした実践へつなげることができる。

・「できたこと」を振り返ることで、実践意欲を高めることができる。

・調理台の使い方や、調理器具の大きさなどを工夫することで、「1人で調理する力（1人1調理）」を育みたい。

全体指導より

文部科学省 教科調査官 熊谷有紀子 氏

○学習指導要領の「よりよい実施」を！

- ①家庭科の目標と内容を常に確認して取り組む
・・・学習指導要領の目標と内容を確実に！
- ②「問題を見いだして課題を設定する」プロセスを大切に
・・・教師が有効な「手立て」を用意したり、思考を促す声掛けをしたりする！
- ③小・中・高の内容のつながりを意識して
・・・小学校で教えるべき内容を押さえて確実に！

<目指す子供の姿>

- ・着実に知識及び技能を身に付けている姿
- ・相互に学び合う姿
- ・教科の枠にとらわれずに学びを深めていく姿
- ・家庭や地域との関わりをさらに大切にしようとする姿
- ・家庭の一員という意識をもち、楽しく実践しようとする姿



【編集後記】

令和5年度小学校家庭科研究部の活動への御理解、御協力をいただきありがとうございました。

全3回の研修会では、個別最適な学びと協働的な学びについての講話、小中合同での研修、家庭科ノートの使い方研修、芳川小、和地小での授業研修を行いました。これらを通じて、「よりよい生活を自ら創り出す子供の育成」について理解を深めることができました。次年度も、小学校家庭科部全体の授業改善につながる研修の場としていきたいと思えます。

※なお新しい家庭科ノート(浜松版)が発行されますので、手に取って御検討ください。

浅間小学校 河村 鮎美